



Toujita
A Retrospective
Commemorating the 50th Anniversary of his Death

没後
50年

藤田嗣治展



没後
50年

藤田嗣治展

Foujita
A Retrospective
Commemorating the 50th Anniversary of his Death

[会場] 京都国立近代美術館 京都市左京区岡崎円勝寺町

[会期] 2018年10月19日(金)～12月16日(日)

[開館時間] 午前9時30分～午後5時 ※金・土曜は午後8時まで(入館は閉館の30分前まで)

[休館日] 月曜日

[主催] 京都国立近代美術館、朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKプラネット近畿

[後援] 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本 [協賛] 損保ジャパン日本興亜、大日本印刷、JR西日本

[特別協力] 国際交流基金 [協力] 東京美術俱楽部、日本航空

[観覧料]	一般	大学生	高校生
当日券	1,500円	1,100円	600円
前売／団体(20名以上)	1,300円	900円	400円

早割ペア券(2枚組)
一般のみ、1名様で2回使用も可
2,000円
猫に深い愛情を寄せて
いた藤田嗣治にちなみ
2,222
セット 限定販売

*中学生以下、心身に障がいがある方とその付添者1名は無料(要証明) ※早割ペア券は8月1日から8月31日まで期間限定販売(限定セット数完次第終了) ※前売券は9月1日から10月18日まで期間限定販売 ※チケットの販売先: オンラインチケット(公式サイト)、主要なブレイガイドほか

[展覧会公式サイト] fujita2018.jp [お問い合わせ] 075-761-4111(京都国立近代美術館)

[報道関係お問い合わせ先] 「没後50年 藤田嗣治展」(京都展)広報事務局

〒541-0046 大阪市中央区平野町4-7-7平野町イシカワビル(TMオフィス内) TEL 06-6231-4426 FAX 06-6231-4440 Mail fujita2018@tm-project.jp

*会期中に一部展示替えがあります。出品作品は変更になる可能性があります。

*東京展: 2018年7月31日(火)～10月8日(月・祝) 東京都美術館

また、京都展の後、本展を再編成して2019年1月16日(水)～3月16日(土)、パリ日本文化会館でも藤田嗣治展を開催します。



京都国立近代美術館 (岡崎公園内)
The National Museum of Modern Art, Kyoto

The painter Léonard Tsuguharu Foujita (1886-1968) was born in Japan in the middle of the Meiji period (1868-1912), but subsequently became a prominent member of the *École de Paris* (School of Paris), the group of émigré artists who made their home in Paris in the first part of the 20th century. Foujita spent nearly half of his life (which spanned more than eight decades) in France, eventually acquiring French citizenship and dying in Europe. This exhibition, organized with the cooperation of museums in Japan, U.S.A., France, and elsewhere in Europe, provides a major retrospective of Foujita's entire artistic career on the 50th anniversary of his death. It provides new perspectives and endeavors to capture the essence of his art through a chronological display of major works from each period, organized by genre and including landscapes, portraits, nudes, and religious themes. Among the many highlights are a number of major nudes painted in Foujita's signature *Grand fond blanc* ("milky white"). Some of these works have rarely been exhibited in Japan or will be shown here for the first time.

[Venue] The National Museum of Modern Art, Kyoto

[Exhibition Period] Friday, October 19 - Sunday, December 16, 2018

[Closed] Mondays

[Opening Hours] 9:30 - 17:00 (9:30 - 20:00 on Friday and Saturday)

*Final admission : 30 minutes before closing

[Admission] General 1,500(1,300) /
University Student 1,100(900) /
High School Student 600(400)

*() : Refer to advance and group discount tickets.
Group discount ticket : more than 20 persons.

*Admission free for visitors junior high school age
(Under 14 years of age)



日仏交流160周年
160^e Anniversaire
des relations
franco-japonaises





ごあいさつ

明治半ばの日本で生まれ、80年を超える人生の約半分をフランスで暮らし、晩年にはフランス国籍を取得して欧州の土となった画家・藤田嗣治(レオナール・フジタ、1886-1968)。2018年は、エコール・ド・パリの寵児のひとりであり、太平洋戦争期の作戦記録画でも知られる藤田が世を去って50年目にあたります。この節目に、日本はもとよりフランスを中心とした欧米の主要な美術館の協力を得て、画業の全貌を展覧する大回顧展を開催します。

本展覧会は、「風景画」「肖像画」「裸婦」「宗教画」などのテーマを設けて、最新の研究成果も盛り込みながら、藤田芸術をとらえ直そうとする試みです。藤田の代名詞ともいえる「乳白色の下地」による裸婦の代表作が一堂に会するだけでなく、初来日となる作品やこれまで紹介されることが少なかった作品も展示されるなど、見どころが満載の展覧会です。

みどころ

1 質、量ともに、史上最大級の大回顧展です。

没後長らく画業を通覧する展覧会が開催されることの少ない画家でしたが、2006年頃からは大小の展覧会が続いています。そのような中、特に今回は没後50年にふさわしく、史上最大級の規模で、精選された作品100点以上が一堂に展示されます。

2 これまでにないほどのスケールで、欧米の主要な美術館から作品が来日します。

パリのポンピドゥー・センター、パリ市立近代美術館、ベルギー王立美術館、ジュネーヴのプティ・パレ美術館、アメリカのシカゴ美術館など、欧米の主要な美術館から、初来日作品も含め約20点の代表作がこの機に集います。

3 藤田の代名詞ともいえる「乳白色の裸婦」10点以上が一堂に会します。

数年前に修復を終えた大原美術館の《舞踏会の前》や、東京国立近代美術館の《五人の裸婦》など国内の代表作に加え、ポンピドゥー・センターやジュネーヴのプティ・パレ美術館など海外からも、「乳白色の下地」による裸婦、なかでも最盛期1920年代の作品が集います。



© 朝日新聞社

LÉONARD FOUJITA

1886 - 1968

私は、世界に日本人として生きたいと願ふ、
それはまた、
世界人として日本に生きることにもなるだらうと思ふ。

— 藤田嗣治『隨筆集 地を泳ぐ』(1942年)より

西暦（和暦）	年齢	藤田の生涯【青字は社会の動き、太字は本展出品作品】
1886（明治19）	0歳	11月27日、東京府牛込区（現・新宿区）に、藤田嗣章と政の次男として生まれる。
1888（明治21）	2歳	陸軍軍医であった父の転任で熊本へ。
1891（明治24）	5歳	母・政、死去。
1893（明治26）	7歳	4月、熊本県尋常師範学校附属小学校入学。 翌年、日清戦争が勃発。
1898（明治31）	12歳	東京市四谷区（現・新宿区）の長姉の嫁ぎ先に移る。高等師範学校附属小学校に転入。
1900（明治33）	14歳	4月、高等師範学校附属中学校に入学。この頃、画家になる想いを父に手紙で伝え、許される。 パリ万国博覧会開催。
1903（明治36）	17歳	暁星中学校夜間部で、フランス語を習い始める。
1905（明治38）	19歳	4月、東京美術学校予科に入学、9月に同西洋画科に入学。 日露戦争終結。
1910（明治43）	24歳	3月、東京美術学校卒業。卒業制作は《自画像》ほか2点。
1912（明治45／大正元）	26歳	鶴田とみと結婚。大久保百人町（現・新宿区）に住む。
1913（大正2）	27歳	春、赴任中の父のいる朝鮮半島を訪れる。3年の約束でフランス留学に旅立つことになり、6月18日、単身欧州航路で出発。 8月5日、マルセイユ着、翌日パリに到着、モンパルナスに定住する。
1914（大正3）	28歳	7月28日、第一次世界大戦勃発。 日本からの送金が滞り、生活が困窮する。
1916（大正5）	30歳	1月、戦時下のパリを離れ、ロンドンに待避。父に留学継続の手紙を送り、自活を宣言。年末とみと離別。
1917（大正6）	31歳	年初にパリに戻る。3月、フェルナンド・バレーと結婚。この頃、シェロン画廊と契約し、生活が安定する。
1918（大正7）	32歳	春から夏にかけ、モディリアーニ、ステインらと南仏カーニュで過ごす。 11月、第一次世界大戦終結。
1919（大正8）	33歳	11月、サロンドートンヌに6点を初出品し、全点入選。
1921（大正10）	35歳	11月、サロンドートンヌに《自画像》《横たわる裸婦と猫》《私の部屋、目覚まし時計のある静物》を出品。 初めて裸婦を発表し、独自の画風が注目される。
1922（大正11）	36歳	《自画像》（1921年）がベルギー王立美術館買い上げとなる。 《私の部屋、目覚まし時計のある静物》を恩師・和田英作が日本に持ち帰り、《我が画室の内にて》として第4回帝展に出品。
1923（大正12）	37歳	サロンドートンヌに《五人の裸婦》、サロン・デ・テュイルリーに《タビスリーの裸婦》を出品。 9月1日、関東大震災。
1924（大正13）	38歳	フェルナンドと別居し、リュシー・パドゥー（愛称・ユキ）と暮らし始める。
1925（大正14）	39歳	サロン・デ・テュイルリーに《舞踏会の前》などを出品。フランスからレジオン・ドヌール勲章、ベルギーからレオポルド一世勲章を受章。



1890年頃 左から 長姉 喜久、嗣治、兄 嗣雄、次姉 康子 Photo: 東京藝術大学蔵



1924年 モンパルナス（パリ）の自宅にて

Photo: Roger-Viollet/aflo

西暦（和暦）	年齢	藤田の生涯【青字は社会の動き、太字は本展出品作品】
1929（昭和4）	43歳	5月、パリ国際大学都市の日本館が開館。藤田が制作した壁画《欧人日本へ到来の図》《馬の図》がサロンを飾る。9月、ユキを伴い16年ぶりに日本に帰国。 10月、東京朝日新聞の展覧会で個展を開催し、大阪と福岡にも巡回。東京・日本橋三越でも個展を催す。第10回帝展に《自画像》（1929年）出品。『藤田嗣治画集』と隨筆集『巴里の横顔』を出版。 10月24日、アメリカで株が暴落、世界大恐慌が起きる。
1930（昭和5）	44歳	1月、日本を発ち、アメリカ経由でパリに戻る。
1931（昭和6）	45歳	秋、ユキと別れ、10月、マドレース・ルターを伴い、中南米への旅に出る。ブラジル滞在。
1932（昭和7）	46歳	アルゼンチン、ボリビア、ペルー、キューバなどをまわり、メキシコに行く。
1933（昭和8）	47歳	メキシコに約7ヵ月滞在後、アメリカ西部を経由して、11月、日本に帰国。
1934（昭和9）	48歳	2月、銀座の日動画廊で個展を開く。夏、東京市淀橋区（現・新宿区）の義兄・中村緑野邸内にメキシコ風のアトリエを建てる。 9月、第21回二科展に《メキシコに於けるマドレース》など27点を特別陳列。9～10月、銀座のブラジル珈琲販売宣伝所に壁画を制作。11月、中国旅行。
1935（昭和10）	49歳	4月中旬から約1ヵ月、大連、奉天などに出張。夏、日本各地を旅する。9～11月、銀座の洋菓子店コロンバンの天井画を描く。
1936（昭和11）	50歳	5月、京都の関西日仏学館のサロンの壁画を制作。6月29日、マドレースが急死。夏頃、東京市四谷区（現・新宿区）左門町に転居。12月、堀内君代と暮らし始める。『腕一本』出版。
1937（昭和12）	51歳	2～3月、秋田の平野家の米蔵で大型壁画《秋田の行事》を制作。7月、東京市麹町区（現・千代田区）に自宅が完成。 7月7日、盧溝橋事件。日中戦争が始まる。
1938（昭和13）	52歳	4～5月、沖縄旅行。10月、海軍省嘱託として中国に派遣され、漢口攻撃戦に従軍。11月帰国。
1939（昭和14）	53歳	4月、君代を伴って横浜を出港。アメリカ経由で再渡仏。 9月、第二次世界大戦勃発。
1940（昭和15）	54歳	5月、戦況悪化のため、マルセイユから日本に向けて出港。7月、東京着。8月、トレードマークのおかっぱ頭を丸刈りに。9月、ノモンハンに取材、10月帰国。
1941（昭和16）	55歳	1月、父・嗣章死去。7月、帝国芸術院会員となり、10月仏領インドシナに派遣される。仏印巡回日本画展に出品するだけでなく、随行して講演を行う。 12月8日、太平洋戦争勃発。
1942（昭和17）	56歳	2月、「隨筆集 地を泳ぐ」刊行。12月、第1回大東亜戦争美術展に《シンガポール最後の日》ほかを出品し、翌年1月、昭和17年度朝日文化賞が贈られる。
1943（昭和18）	57歳	9月、国民総力決戦美術展に《アツク島玉碎》を出品。
1944（昭和19）	58歳	秋、空襲を避けて神奈川県津久井郡小淵村藤野（現・相模原市緑区）に疎開。
1945（昭和20）	59歳	3月、陸軍美術展に《サイパン島同胞臣節を全うす》などを出品。空襲で麹町の留守宅焼失。 8月15日、日本がポツダム宣言を受け入れ、終戦。 12月、戦争関連画がアメリカに接収されることになり、説明などのためにGHQ嘱託となる。
1946（昭和21）	60歳	4月、日本美術会の結成により、美術界における戦争責任追及が始まる。藤田はパリ行きを準備、フランス領事館に査証を申請。 「作戦記録画」がGHQに接収され、 1951年アメリカに運ばれる。
1947（昭和22）	61歳	2月、GHQが戦争犯罪者リストを公表、藤田の戦犯の疑いが晴れる。
1949（昭和24）	63歳	3月10日、羽田を単身で空路で発ち、ニューヨークに定住。5月、君代が合流。11月、マシアス・コモール画廊で個展。《カフェ》ほか出品。
1950（昭和25）	64歳	1月、フランス入国許可が下り、ニューヨークを出発してパリに向かう。3月、ポール・ペトリデス画廊で個展。
1951（昭和26）	65歳	1月にアルジェで個展、11月にマドリードで個展。
1955（昭和30）	69歳	2月、君代とともにフランス国籍を取得して、日本国籍を放棄。
1959（昭和34）	73歳	10月、ランスのノートル＝ダム大聖堂で君代とともにカトリックの洗礼を受ける。洗礼名はレオナール。
1961（昭和36）	75歳	11月、パリ郊外のヴィリエ＝ル＝バクルの農家を改造してアトリエ兼住居とし、転居する。
1966（昭和41）	80歳	ルネ・ララー氏の協力で、ランスに礼拝堂を建てることを決意。 ノートル＝ダム・ド・ラ・ベ礼拝堂（シャベル・フジタ）の建物完成後、6月に内部のフレスコ画制作に着手、8月末に完成。12月、パリの病院に入院。
1968（昭和43）		1月29日、チューリヒ州立病院で死去。享年81歳。ランス大聖堂で葬儀が行われる。



中南米に滞在中の藤田 © Conseil départemental de l'Essonne & Musée Maison-Atelier Foujita



1940年 戦火を逃れて帰国した時の藤田嗣治と君代 © 朝日新聞社



1966年 ランスの礼拝堂のフレスコ画仕上げに余念のない藤田嗣治 © 朝日新聞社

原風景——家族と風景

藤田は明治半ばの東京で、陸軍軍医・藤田嗣章の次男として生を受けました。父の転任に伴い、幼少期を熊本で過ごした彼は小学校高学年で東京に戻ります。明治30年代の東京で青春期を過ごした藤田は、画家になり、そしてパリに留学する夢を育み、画技やフランス語の習得に励みました。1905年には東京美術学校西洋画科への入学を果たし、黒田清輝や和田英作の指導のもと、プロの画家への第一歩を踏み出します。学生時代の藤田は決して優等生ではなかったようですが、それでも着実に「白馬会風」の表現を体得し、父や自らの姿、そして父の赴任先である朝鮮半島を訪れた際にはその風景など、自らの「原風景」を絵筆で残しました。

《自画像》

1910年 油彩・カンヴァス 60.6×45.5cm
東京藝術大学蔵

藤田23歳、生涯描き続けることになる自画像の第一作。東京美術学校西洋画科の卒業制作として描かれた。堅実な写実描写には、当時の教官であった白馬会の画家たちの影響が見られるが、これから画家として社会に出ようとする自信と強い意志は、斜に構えたポーズや表情からも見てとることができる。渡仏前の作風を示す貴重な現存作品のひとつ。



はじまりのパリ——第一次世界大戦をはさんで

1913年8月、26歳の藤田は念願のパリに到着し、モンパルナスに住んで、さっそくこの地の前衛美術の洗礼を受けます。しかし、その1年後には第一次世界大戦が勃発し、欧州残留を決意した彼は、東洋人たる自分が現地で売って生活しうる絵画とはなにか、という問いに直面します。ここでは大戦前後の1910年代のパリで、まだ無名の藤田が手がけた、キュビズムに影響を受けた絵画、もの寂しいパリの「周縁」を描いた風景画、当時親しくつきあっていたモディリアーニの影響をうかがわせる人物表現、1920年代前半に彼の名声を確立していく静物画を取り上げます。いずれもパリ、セーヌ川左岸のモンパルナスに構えたアトリエの室内と近隣の風景を刻印した、30歳前後の藤田の作品群です。そこには「乳白色の下地」誕生前の、発展途上の素朴な魅力があります。



Photo © Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais / Jean-Claude Planchet / distributed by AMF © Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



Photo: Studio Monique Bernaz, Genève
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



Pola Museum of Art, Pola Art Foundation © Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

《巴里城門》

1914年 油彩・カンヴァス 33.7×41.7cm ポーラ美術館

1910年代に多く描かれる、パリ周縁の風景画の原型となった作品。第一次世界大戦後の開発により大きく変貌を遂げる前の、城門跡のうら寂しい風景を忠実にとらえている。藤田が一度売却したのち、1932年に旅先のアルゼンチンで発見して買い戻した経緯や「最初の会心の作」であったことが、絵の裏側に記されている。

藤田の出世作

《私の部屋、 目覚まし時計のある静物》

1921年 油彩・カンヴァス 130.0×97.0cm
ポンピドゥー・センター(フランス・パリ)蔵

独特の白い下地に細い墨の線で描くという技法によって完成した初めての静物画。1921年のサロン・ドートンヌに出品され、翌年には日本の帝展にも送られて母国での本格的なデビュー作となった。モンパルナス、ドランブル通りのアトリエ内に私物を配置して描いた。アトリエの主人を描かず、愛用品のみで画家自身を象徴する意図を感じさせる。

《二人の少女》

1918年 油彩・カンヴァス 81.0×65.0cm
ブティ・パレ美術館(スイス・ジュネーヴ)蔵

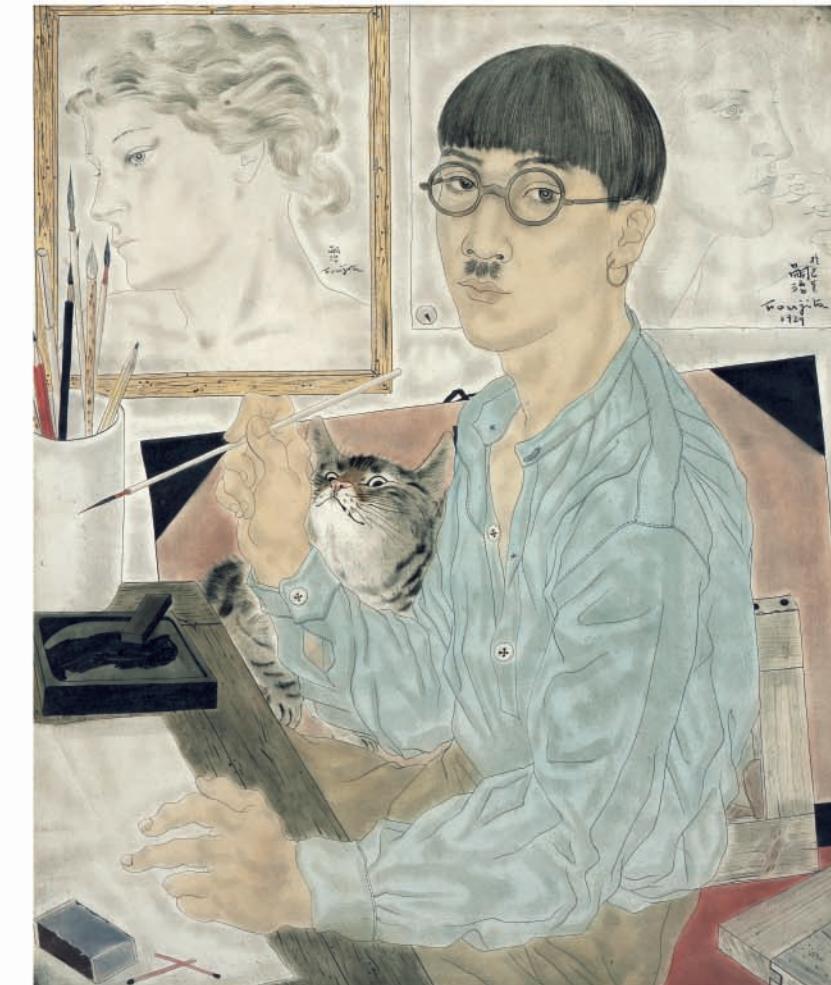
少女が2人横に並び正面を向いた絵を、藤田は1910年代末にいくつか描いている。黒い瞳や小さな鼻と口、広い額などを特徴とするが、年頃や髪形などの違いから、特定のモデルの存在が考えられる。背景はモチーフを描き込みず、色彩とマチエールを強調した筆触で埋められており、1920年代前半の「乳白色の下地」へと向かうプロセスを示している。

1920年代の自画像と肖像 —「時代」をまとうひとの姿

藤田は東京美術学校の卒業制作で描いた20歳代前半から、1960年代後半、80歳代を迎えた最晩年の姿まで、半世紀以上にわたり、継続的に自画像を残しています。ここではパリで本格的なデビューをした直後の1921年、おかっぱ頭になりつつもいまだ不安げな表情をした自画像に始まり、20年代後半、売れっ子になってからの、アトリエでお気にいりの「もの」や猫に囲まれた姿をそろえました。一方、20年代に入ると、パリのセレブリティからの肖像画注文が続くようになります。東洋出身の新星に描いてもらおうという、好奇心旺盛な女たちでした。ときはアール・デコの時代。特有のドレスをまとった人物と背景の室内装飾を、藤田は絶妙に組み合わせて描きました。華やかな20年代のパリという時代をまとった女性やその家族が刻印されています。



© The Art Institute of Chicago / Art Resource, NY © Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

《エミリー・クレイン＝シャドボーンの肖像》

日本
初出品

1922年 油彩、銀箔、金粉・カンヴァス 89.5×146.1cm
シカゴ美術館(アメリカ)蔵

藤田の1920年代の人物表現のなかでも代表作のひとつ。衣装やソファーの模様や触感が緻密に描写され、背景は銀箔で覆われている。藤田は20年代に金箔をしばしば用いたが、銀箔が確認できるのは本作のみである。モデルとなった注文主は、当時パリに暮らしていたシカゴ出身の富裕なアメリカ人女性。晩年に自らの収集作品を地元の美術館に寄贈した。

《自画像》

1929年 油彩・カンヴァス 61.0×50.2cm
東京国立近代美術館蔵

1920年代半ば、パリでの絶頂期を迎えた藤田は、アトリエでの自画像をひんぱんに描いている。おかっぱ頭に丸眼鏡、ちょび髭、ピアスといった個性的な風貌とともに、日本の伝統を生かし、独自の乳白色地によるスタイルを生み出した画家像を演出するイメージ戦略をうかがわせる。16年ぶりの一時帰国を果たした1929年の第10回帝展に出品された。

4

「乳白色の裸婦」の時代

いまや裸婦の画家として定評のある藤田ですが、1910年代以前の作例は残っていません。20年代初頭、藤田はようやく「乳白色の下地」に黒く細い輪郭線で描くという独自の絵画スタイルにたどり着き、その繊細な下地の白さや質感をもつとも生かす画題として、初めて本格的に裸婦に取り組みます。1921年のサロン・ドートンヌに初めて裸婦を出品したのち、パリの諸サロンに立て続けに裸婦を出して大きな評判と名声を得ることになります。20年代半ばに一緒に暮らし始めたユキ（リュシー・バドゥー）はそのモデルとして重要な役割を果たします。第一次世界大戦後のパリで、裸婦という伝統的な主題がフランスの再生と成長を象徴するモティーフとして人気を集めしていくことと連動するように、20年代後半にはその白さと独自の質感を高め、単体の裸婦は群像へと展開していきます。《五人の裸婦》と、近年修復を終えた《舞踏会の前》が並び、さらに当時の藤田によるポスター（リトグラフ）も交えて、1920年代パリの雰囲気を演出します。



《舞踏会の前》

1925年 油彩・カンヴァス 168.5×199.5cm
大原美術館蔵

仮面舞踏会で出番を待つ女性たちが描かれている。画面中央の裸婦が当時一緒に暮らしていたユキ、左の着衣の小柄な女性がロシア人画家マリー・ヴァシリエフ。ここでは布の模様の描写は抑えられ、色も淡彩で、画面全体が「乳白色の下地」の絵肌で統一されている。ユキの肌を表した温かみのある白い質感的印象が強く、彼女の足元の黒い仮面を際立たせている。
1925年サロン・デ・テュイリー出品作。

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

《タピスリーの裸婦》

1923年 油彩・カンヴァス 126.0×96.0cm
京都国立近代美術館蔵

1920年代初期の裸婦像には、装飾的な綿布との対比により白い人肌の美を引き立たせた作品もある。本作では、裸婦もさることながら、彼の持ち前の描写力は背景の綿布にも向けられている。フランス更紗に典型的な、エキゾチックな草花模様を刷った「ジュイ布」を克明に描いている。1923年サロン・デ・テュイリー出品作。

1930年代・旅する画家——北米・中南米・アジア

藤田が16年ぶりに一時帰国中の1929年10月に世界大恐慌が起り、早くも翌年にはその影響がヨーロッパやアジアにまで及びます。経済的にも家庭生活でも破綻をきたした彼の1930年前後の作品は、それまでの「乳白色」のイメージを破壊するかのような濃厚な色彩とグロテスクとでもいいくべき裸婦によるシュルレアリズム風のものとなりました。そして1931年秋、20年近く続いたパリでの暮らしを放棄し、ユキとも別れ、あらたにマドレーヌを連れて中南米に旅立ちます。そこから約2年にわたり、各地を旅し、現地制作して展示販売する「旅絵師」のような日々を続け、中南米の風俗や風土にまなざしと絵筆を向けました。北米を経て、1933年晩秋には日本に帰国し、東京に定住後は、東北地方や沖縄、そして日本が進出を深める中国大陸へと、アジア圏内の旅を重ねます。移動が続いたこと也有ってか、水彩による作例がほかの時代よりも多いのが特徴です。



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

《メキシコに於けるマドレーヌ》

1934年 油彩・カンヴァス 91.0×72.5cm
京都国立近代美術館蔵

《自画像》

1936年 油彩・カンヴァス
127.7×191.9cm
公益財団法人平野政吉美術財団蔵

1933年晩秋に帰国後、四谷左門町の日本家屋に仮住まいした際の食事中の自画像。50歳を迎えたおかげで頭には白髪がまじる。「下町の江戸趣味」と称して集めた調度類を執拗なまでに描いている。茶道具文様を藍で染め抜いた布は愛好の品で、遺品に現存する。1936年の第23回二科展に出品された。

速筆で描かれ塗り残しも見えることから、現地で制作したような印象を与えるが、メキシコでの素描や写真をもとに帰国後に東京で制作された作品。モデルはパリからアメリカ大陸縦断の旅をともにしたマドレーヌ。藤田は「ヨーロッパと中央アメリカとの対照」をねらったものだと述べている。1934年第21回二科展で、帰国を記念した特別展示に並んだ1点。

「歴史」に直面する——作戦記録画へ

藤田は1939年4月、ふたたびパリへと向かいます。この時の滞在は、同年9月の第二次世界大戦勃発とドイツ軍のパリ接近に伴い、翌年5月までの約1年と限られましたが、この間の制作は現地の画材や画題に服して、極めて充実したものとなりました。1940年初夏に帰国した彼は、祖国の「非常時」に際して長年馴染んだおかげで頭を丸刈りにあらため、戦線取材と「作戦記録画」の制作に邁進します。日中戦争下の中国大陸から、日本軍の南進と太平洋戦争の開戦に伴い、南方の戦場への旅が続きます。大陸での乾いた大地を描いた精緻な風景表現から、次第に芸術的な戦争表現を求めて、西洋美術史上の戦争をテーマとした絵画の研究に力を注ぎます。1943年初夏、初めての日本軍の「玉碎」の報に接して《アツ島玉碎》を描いて以降、戦場を見すともこれまでの経験と古今東西の戦争画像の参照によって、空前絶後の、人体の肉弾戦を中心とした茶褐色の「玉碎画」への陶酔を深めていきました。



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

《アツ島玉碎》

1943年 油彩・カンヴァス 193.5×259.5cm
東京国立近代美術館蔵(無期限貸与作品)

1943年5月の北太平洋アリューシャン列島アツ島での日米の戦闘を、写真と想像力をよりに自らの意思で描いた作品。前景は三角形構図の組み合わせで表現された兵士で埋め尽くされ、ロマン主義以前の西洋の戦争画の研究と傾倒がうかがえる。1920年代後半以降藤田が追及してきた大画面の群像表現のひとつの到達点といえる。1943年9月の「国民総力決戦美術展」に出品。

《猫》

1940年 油彩・カンヴァス 81.0×100.0cm
東京国立近代美術館蔵

猫を扱った藤田の作品の中で最もよく知られた作品。第二次世界大戦勃発後、ドイツ軍が迫るパリで描かれたもの。飛び上がる猫、うなり声をあげる猫、転げまわる猫など、14匹がさまざまな姿態を見せて格闘している。渦を巻いているような大胆な構図は、繊細な線描によって見事にまとめられている。帰国後、1940年初秋の第27回二科展に《争闘》のタイトルで出品された。

戦後の20年——東京・ニューヨーク・パリ

1945年8月の終戦を迎え、戦中の国策協力を糾弾されるなか、藤田は日本を離れる準備を始める一方で、戦時には控えていた裸婦など、本格的な制作を再開します。そして、1949年3月10日、藤田は羽田から空路、西洋社会へと戻っていきます。これが母国・日本との永別となりました。パリに戻るまでの約1年弱を過ごしたニューヨークは彼にとって西洋名画・文化との再会の場となり、制作意欲はたいへん高揚し、名品が生まれました。1950年2月にふたたびパリの土を踏んだ60歳代の画家は、戦争で傷つき、エコール・ド・パリの時代から次第に遠ざかるこの街で、戦前のパリの名残、かけらを寄せ集めるかのように、古い街並みや新しい時代に失われていく風俗、そして子どもたちに絵筆を向けていきました。



© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833



Photo © Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais / Jacqueline Hyde / distributed by AMF
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

《フルール河岸 ノートル=ダム大聖堂》

1950年 油彩・カンヴァス 38.0×46.0cm
ポンピドゥー・センター（フランス・パリ）蔵

フルール河岸はセーヌ川に浮かぶシテ島の東側にある通りで、古くから花の市場で賑わった場所。画面左、路地の奥にノートル=ダム大聖堂の尖塔が見える。この眺めは藤田のお気に入りで、同じ構図の作品を何点か残している。本作は制作の翌年に《私の部屋、目覚まし時計のある静物》、《カフェ》とともにフランス国立近代美術館に寄贈された。

《私の夢》

1947年 油彩・カンヴァス 65.5×100.0cm
新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵

戦後、初めて発表された裸婦の図像は《眠れる女》（1931年）のマドレーヌ像から転用されている。擬人化された動物は1950年代、画家の重要なモチーフへと発展する。戦争責任問題で揺れる周囲をよそに、新天地での生活を夢見る藤田自身が裸婦の姿に投影されているかのようだ。1947年5月「東京都美術館開館20周年記念現代美術展覧会」出品作。



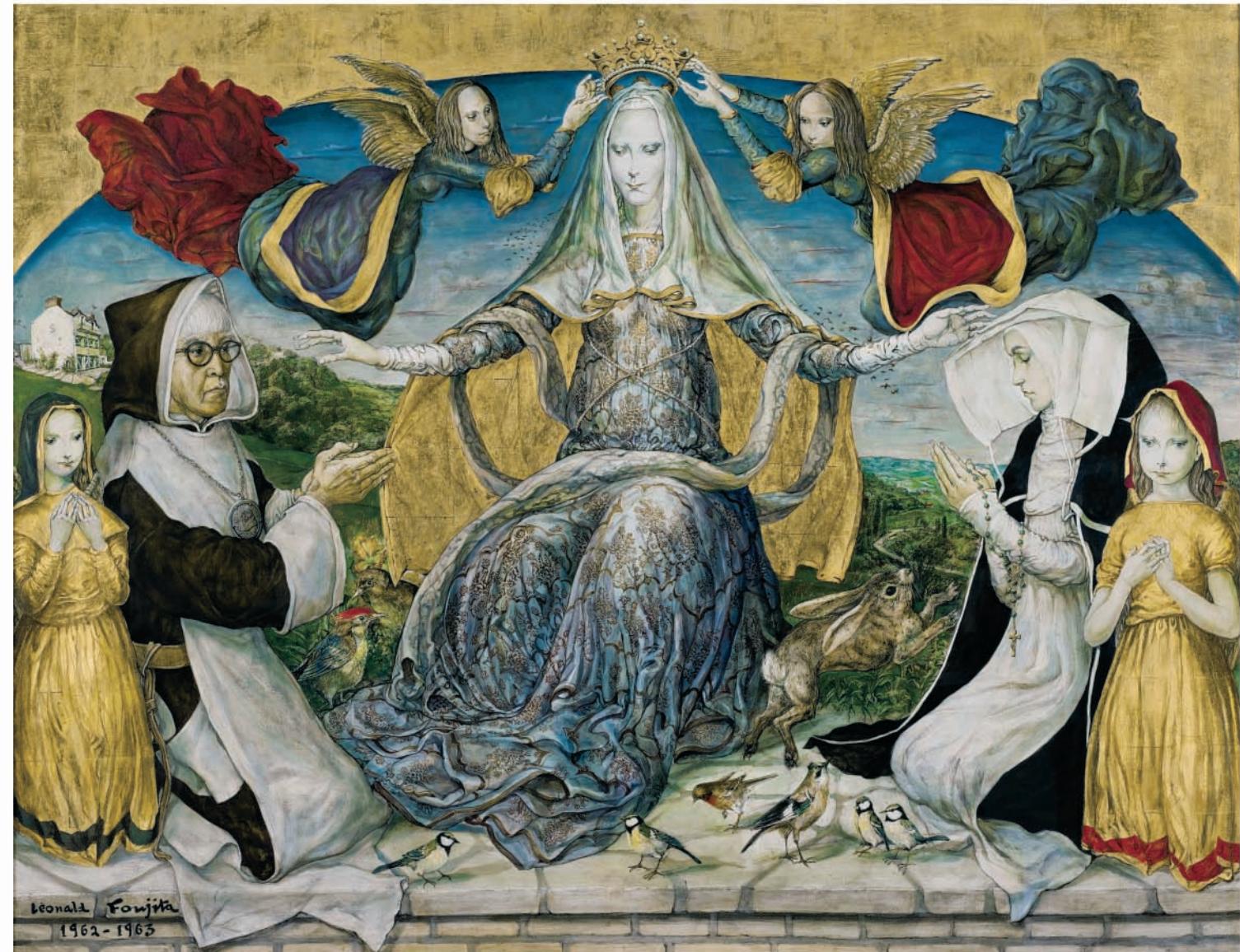
《カフェ》

1949年 油彩・カンヴァス 76.0×64.0cm
ボンビドゥー・センター（フランス・パリ）蔵

1949年3月に日本を離れた藤田が、その後滞在したニューヨークで制作した作品。女性の背後の窓越しに、カフェ「ラ・プティット・マドレーヌ」のあるパリ風の街角が見える。黒く細い輪郭線による描写は対象の三次元性を強調しているが、同時に女性のドレス、鞄、紳士の帽子等の色彩としての黒の魅力も際立っている。画家手製の額縁はカフェにふさわしいモティーフで飾られている。

カトリックへの道行き

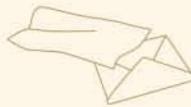
1950年にパリに戻り、55年にはフランス国籍を取得した藤田は、1959年10月14日、フランス北東部の歴史ある街ランスの大聖堂で、妻とともにカトリックの洗礼を受けました。洗礼名は、敬愛するレオナルド・ダ・ヴィンチにちなみ、「レオナール」。以後の作品には「L.Foujita」「Léonard Foujita」とサインするようになります。その後、制作で数を増したのが、キリスト教をテーマにした絵画でした。1910年代から、キリスト教自体やそれをテーマにした絵画を描いてはいましたが、洗礼後は「フランス人・キリスト教徒」として、熱心な図像研究を重ねて制作しました。それでも現地の観衆にとっては東洋人が描くキリスト教絵画であることにはかわりなく、市場性を期待せず、彼の信仰の証として描かれました。なかでも《ふたりの祈り》と《十字架》は長らく自宅での晩年の暮らしをともにした遺愛の作です。



《礼拝》 1962-63年 油彩・カンヴァス 114.0×143.0cm パリ市立近代美術館(フランス)蔵

© Musée d' Art Moderne / Roger-Viollet © Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 E2833

緻密な模様の衣をまとった聖母に対し、藤田は修道士の服装で妻の君代とともに祈りを捧げている。周囲には少女と動物たちが、画家の背後には前年に移住したパリ近郊の村ヴィリエ＝ル＝バクルの家が描かれている。「乳白色の下地」を用いながらも、絵具層の色の鮮やかさとコントラストが印象的。晩年の代表作であり、藤田芸術の集大成といえる。



あれこれエピソード



藤田流自己プロデュース

おかげで頭、丸眼鏡、ちょび鬚——1913年の渡仏以降、藤田嗣治のイメージは、この3点セットで広く世間に知られてきました。独特的な髪型はルーヴル美術館で見たギリシア彫刻に影響されたとも、第一次世界大戦時に窮屈した時、自分でカットしやすい髪型を工夫したとも伝えられています。当時珍しかった東洋人のまっすぐな黒髪をいかした個性的なスタイルとエキゾチックな容貌は、1910年代のパリでは大変目立ちました。そして、この個性的な容貌を自画像として描き発表しつづけることで、「藤田嗣治」という画家をわかりやすくアイコン化することに成功し、やがてモンパルナスの寵児としての地位を確立していくのです。



アトリエに残された手作りの愛用品たち

パリ郊外の小さな村ヴィリエ＝ル＝バクルにひっそりとたたずむ、藤田が最後に住んでいた自宅兼アトリエ。ここには、藤田自身が手作りした家具や装飾品、カーテンやベッドカバー、洋服などが今も大切に保管されています。もともと手先が器用で、裁縫、模型作り、大工仕事や陶芸までも幅広くなっていた藤田ですが、この家に移り住んでからは、ますます身の回りの日用品を手作りすることに熱中しました。また、クリスマスや誕生日、ちょっとした記念日などには、「君代のために」とサインを入れて、妻への贈り物を手作りすることも欠かしませんでした。これらは長年実際に使用されており、時を経ても決して色あせることのない、藤田の豊かな感性と妻への愛情が感じられる遺愛の品々です。



藤田をめぐる女性たち

藤田はその生涯で5人の女性と暮らしました。渡仏前に結婚し日本に残してきた最初の妻とみ。異国の言葉や文化への理解を助け、パリでの修業時代を支えた2番目の妻フェルナンド。1920年代の全盛期、モデルとしてのみならず、華やかな社交活動をともに送った3番目の女性ユキ。そのしなやかな体つきと愛くるしい容貌で藤田を魅了し、1930年代、中南米や日本への旅にも同行した4番目の女性マドレーヌ。そして晩年、カトリックへの改宗、フランスへの帰化などにも寄り添った最後の妻君代。生涯を通じて画家のインスピレーションの源になったのは、彼を支えた女性たちの存在であり、パートナーが変わるたびに、藤田の画風も変化していったのです。



「素晴らしい白い下地 (grand fond blanc)」の秘密

白くて光沢のある滑らかな絵肌、日本の面相筆と墨で描かれた細くて印象的な輪郭線。この技法を実現させるために、藤田は自らカンヴァスを手作りしたと言われていますが、その材料と過程については、長い間、謎に包まれていました。しかし、ここ数年で科学的なアプローチや写真資料等の研究が進み、少しづつ、この乳白色の秘密が明らかになってきています。藤田が使用したのは、目の細かい麻布とタルクと呼ばれる灰滑石の粉。このタルク、私たち日本人には「ベビーパウダー(シッカロール)」と言えばより馴染みがあるでしょうか。タルクは水と親和性があり墨の滲みを防止するだけではなく、画材と混ぜることで透明度が増し、藤田作品の特徴である上品で美しい乳白色を生み出す効果がありました。



藤田と舞台美術

戦前戦後を通じて、ヨーロッパでは、ピカソをはじめとする多くの画家たちが舞台美術に関わったことが知られています。藤田もまた、1920年代のスウェーデン・バレエ団によるバレエ「孤独な闇」、パリで上演された岡本綺堂原作「修禅寺物語」に基づく劇「ル・マスク」、また、戦後、ミラノ・スカラ座で上演された「蝶々夫人」など、その生涯において、数々の舞台美術に関わりつけました。なかでも興味深いのは、1946年に日本で初めて上演された「白鳥の湖」の衣装や舞台装飾を藤田が手掛けていたということが、近年の研究によって明らかになったことです。没後50年となる今春、東京シティ・バレエ団が当時の美術を再現した舞台「白鳥の湖」を上演し、藤田の舞台美術が現代に蘇りました。



猫へのまなざし

「私は猫を友達としている。」自らのエッセイの中ではっきりとこう述べているように、藤田は捨て猫や迷い猫を見つけると放っておけず、拾って連れ帰り、飼っていました。こうしてアトリエに招き入れられた猫たちを藤田はよく観察し、一瞬の仕草や表情をとらえて数多くの絵画の中に登場させたのです。とくに「裸婦と猫」、「自画像と猫」といった組合せが多く、そこには猫を愛してやまない画家の優しい眼差しが感じられます。一方で、描かれた猫たちもリラックスし、完全に藤田を信頼している様子がよくわかります。中にはあたかも人間の感情を持つかのような表情豊かな猫もいて、まるで対峙する藤田への親愛の情を、私たちに見せつけているかのようです。



2018.10.19 金 ~ 12.16 日